野菜つくりと手術

札幌市医師会
時計台記念病院
青木　貴徳

医師となり早くも27年の歳月が経過します。この間一貫して外科臨床に従事してきました。北海道医報は毎号目を通し、時には旧知の先生の原稿なども熟読し、その文才に驚嘆するものの、まさか自分にその任が回ってくるとは全く思っておりませんでした。なにしろ患者さんと接している時間以外は本でも読んでいないと時間をつぶせない、何の面白みもない人間です。

ただそんな私でも、現在の病院に赴任してからは、実家も近くなり、夏場は父の遺した家庭菜園を引き継ぎ、近年は妻の手伝いも得ながらたくさんの種類の野菜を作っています。小さな建設会社を営んでいた父は、晩年資材置き場の一角を家庭菜園として活用していました。近いといっても車で１時間弱、週末に数時間の手入れしかできず、満足な野菜の出来にはなりません。父が植えたウド、ミョウガ、ブルーベリーなどはほとんど何の手入れもしないまま、毎年きちんと実ります。しかし私の植えたアスパラはまだまだお店で売っているように立派には育ちません。毎年作物を植える場所を変えながら、連作障害を防いではいますが、前年はうまくいったのに、今年は散々ということは当たり前です。年々雑草、特にスギナがはびこるようになり、２週間も放置すると雑草畑と化してしまいます。せっかく実ったイチゴもほとんど収穫前に虫に食われ、次週あたり収穫と思ったら、アライグマにきれいさっぱり食べられてしまうトウモロコシなど、何のため、誰のためにやっているのかなと思うこともしばしば。トマトも思ったようには完熟してくれず、プチトマトはいいけど、桃太郎トマトはさっぱりなど、どうして？大好きなホウレンソウに至っては、種を蒔いてもきちんと発芽するときと全く発芽しない時が、ほぼ同じ条件なのに、どうして？と疑問ばかりの野菜つくりです。写真は、父が植え付けた大根を収穫した時の物ですが、これと同じような大根は何年経ったら育つものかと考えてしまいます。参考にする本も自分の土地の実情に合っていないなぁと感じたりします。

しかし少し視点を変えてみると、本職の手術も同じで、この手術書のこのやり方はわれわれとは違うなとか考えるものです。さらには手術でも、多くの経験を経て、ここをこうするとうまくいくけれど、ああするとうまくいかないということは、やはり科学ではなく経験によりもたらされることも多いのは事実だと思ってきました。手術ではやっとコツがつかめてきたなと思ったら、目が弱り、体力そしてそれに伴う集中力が維持できなくなってきたなと感じるようになりました。野菜つくりもうまくいくようになってきたころには、足腰がもたなくなっているようにも思います。そうなる前に、満足いく出来の野菜ができたらさぞかしうれしいことでしょう。

野菜については自分で試行錯誤し、そこで満足すればおしまいなので気が楽ですが、こと手術となると細かい技術の伝承が大切になります。これまでいくつかの施設では、指導者の立場として手術に臨ませていただきましたが、なかなかうまく伝授し伝承してもらう、というレベルに至ることはありませんでした。昨年より北大消化器外科Ⅱの先生方と仕事をする機会を得ました。教室では後進の指導・育成に力を入れておられ、当院に来てくれる大学院生のもつ臨床能力には、自分のころと比べその差を歴然と感じます。また、そこには科学があるように感じており、自分の過去を反省しながら、よい時代になったものだと思います。反面、野菜は教えてもらう人が周囲にいないので、独学しかないし、また失敗も許されるので、独りよがりもいいし、人間として古くなった私には、ここでは科学は無しで失敗も楽しみのうちかなと思いつつ、楽しんでいきたいものです。現在３月の月末で、この原稿が掲載されるころには数種類の野菜が収穫できているものと信じています。雪解けの今日この頃、土いじりが待ち遠しく感じられます。